

## 私の戦中戦後シベリア抑留二年

吉田 利一（大正 10 年生まれ）

昭和 16 年 12 月 8 日大東亜戦争勃発、我が日本海軍特攻隊により真珠湾攻撃で米海軍の戦艦及び航空母艦を撃沈、毎日の様に大本営発表のラジオニュースが流れて来ました。このニュースを聞く度に私も兵隊に行きお国の為に尽くさなければいけないと思っている矢先、昭和 17 年 8 月 10 日、召集令状が来ました。入隊場所が金沢第 49 部隊、今の兼六公園そばの兵舎でした。そこで 3 か月みっちり歩兵の初年兵教育を受け、外地へ派遣になるから実家に帰り父母に別れをしてこいと、3 泊 4 日の外泊をもらって実家へ帰りました。両親には外地へ行くからもう二度と帰れないと告げ、我が家を後にしました。11 月 8 日、金沢から汽車に乗り日本を離れ朝鮮を通過、満州入り、着いた所がソ連との国境の虎林でした。満州第 4620 部隊宮本隊に編入、虎林で約 1 年半国境警備に当たるのですが零下 30 度にも下がる所で歩哨に立つのが非常に辛いでしたが一線で戦っている戦友を思うと何のそのと自分に言いかせて頑張りました。

昭和 19 年 4 月 29 日、虎林から部隊が龍鎮に移動、その頃南方作戦が負け戦になって来ました。その時各部隊から下士官候補の申込があったので、私もどうせ日本には帰らぬ身であれば志願してみようと下士官教育の為、旅順の共同学校に入り 3 か月みっちり絞られました。中でも日露戦争当時の 203 高地の攻撃を日露の戦の乃木大将が攻撃した同じ日に同時間に攻撃しましたが、203 高地と言う山は高さ 203 メートルのハゲ山で突撃しても 3 歩進んで 2 歩後退する様な山で、そのうえ山の 8 合目あたりにロシアの兵隊が掘った壕があり、ロシア兵がその壕から日本軍が攻めてくるのを待伏せしていたとの事。なかなか陥落することが出来ません。当時軍司令部はなぜ 203 高地を早く陥落せよと乃木大将に命じたか、203 高地を落とせば目下にロシアバルチック艦隊のいる旅順港があるからです。そこで海軍の広瀬中佐、バルチック艦隊を袋のねずみにしようと出口に船を沈めて閉鎖作戦を取る。その時歌にある、杉野は何処何処と呼べど杉野兵曹長は帰らぬ人となる。いかに日露戦争の兵隊が強かったなと身を持って感じました。

戦争が終わり乃木大将とステッセルの会見した水師営の建物も見て来ました。みずばらしいくず屋に机に白い布が掛けてありその後には乃木將軍とステッセルの写真があり建屋の横になつめの木が茂っておりました。

旅順でいろいろな体験をし、元の中隊へ戻り班長として初年兵教育にあたりました。それから段々と南方作戦が不利になり、我が関東軍の兵器、弾薬を南方作戦に持って行き、小銃も 5 人に 1 丁くらいしかなく、そこでもソ連軍が攻めてきた場合、竹槍で交戦する様なしまつでした。これでは戦争も負ける様な感がしました。

昭和 20 年 8 月 15 日、重大ニュースがあると言うので私はその時ハルピンにおりまして、天皇陛下の「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び」と言うお言葉をラジオで聞き、やっぱり負けたのだなぁと感じました。昭和 20 年 8 月 21 日軍命令に依り我が中隊はハルピンを後にアジオに行き、そこで武装解除になり満鉄の貨車に乗りソ連のハバロフスク第 6 収容所に入る。

第6収容所<sup>しゅうようじょ</sup>は約50名の戦友が入り3班くらいに分かれ伐採、道路補修、農場と各の作業場へ歩哨付で行くのですが、収容所を出る時人員点検するのですが、ソ連の兵隊が10列に並ばせ12345・・・10と数えて十算をして確認する様な頭の悪さがわかりました。私は運よく農場の方へ廻り馬鈴薯<sup>ばれいしょ</sup>、キャベツ、玉葱<sup>たまねぎ</sup>、トマト等の手入れ及び収穫の仕事に15人程で働きました。ところが共産主義で働かざるものは食うべからずのすべてノルマ式で、各班でノルマの上がない人達は段々と栄養不良になり死んで行く人がありました。私の班の一例を申しますと、馬鈴薯掘り一人<sup>うね</sup>2畝受け持ち、1日100メートルで100パーセント、とても掘れるものではありません。そこで私は軍隊で鍛えた要領本分を生かし、芋<sup>いも</sup>をおこす時に大きい芋4、5個拾い、小さな芋を土の中に埋めてわからないように進む。そうする事により120パーセントくらいになる。とにかくソ連と言う国は悪い事をしても見つからなければおとがめ無しとの事。100パーセント上げると1斗樽<sup>とたる</sup>1本の高粱飯<sup>こうりやんめし</sup>10人で食べ切れない。ノルマの50パーセントくらいの人達は飯が少ないので栄養失調になり寒さに耐えられず死亡して行くのを見て、我々も同じ仲間なので、せめて食事くらいは平等にしてほしいと申し入れましたところ、受け入れてくれ、120パーセントの者と50パーセントの者食事を同一に食べるようにしました。

そうこうしている中、昭和22年8月頃から第一病弱者を日本へ帰すようになりました。第二次は(ハラシヨラボータ)良く働いた人を帰国させると言う事で、私たち農場班もその仲間になり、11月1日ハバロフスク収容所を後にして(ナホトカ港)に集結、そこでまた3日間の共産主義の教育を受け、赤旗とかインタナショナルの歌を習いながら、共産党になりきり、向こうの言うなりになり歌は真剣に覚えました。そこで合格し、昭和22年11月7日午後5時ナホトカ港を離れ信濃丸<sup>しなの</sup>に乗船、日の丸を見た時に、これでやっと日本へ帰れるのだと涙がとめどなく出ました。船はナホトカ港を後に玄海沖<sup>げんかい</sup>を通り11月10日東舞鶴港<sup>ひがしまいづる</sup>に上陸、2年間の苦勞がいっぺんにふっ飛び、戦争は二度と起こさぬ様、私の体験談を終わります。